街の灯り物語

灯り――それは
そこに暮らしがある証
さまざまな心模様が描かれ
物語が紡がれている証
迎えてくれる灯り
見送ってくれる灯り
そして見守ってくれる灯り
街それぞれに灯りがあり
人それぞれに
心に残る灯りがある
その一つの物語

街の灯り物語

人の本質・心の内を、夜の街の情景で描きたい

真山 仁 作家

初めて灯りを意識したのは、リュックを背負って一人、ヨーロッパを歩いたときだった。大学卒業間近の冬、イギリスの田舎町で、夜道をぽつりぽつりと照らして続くオレンジ色の街灯に心を動かされた。異国で一人だったからか、暗闇の中で小さくともされた灯りに、体温のような温かさを感じた。

大都市は不夜城。すべての闇をなくしてしまう勢いで、真夜中でも輝いている。日本もそう。街じゅうを白く照らし出すことが、高度経済成長の証明だった。そういう明るさに慣れていたから、仄暗い街灯に却って心惹かれたのだろう。

一方で、闇の存在を教えてくれるのもまた、灯りの存在だ。光と闇の両面を知ること――それは私のものの見方、考え方の根幹といえるかもしれない。物事を一方向からでなく多様な方向から見る。昔からあまのじゃくな面があった私は、みんなが「こっちから見るといいよ」と言うと反対から見るような子供だった。それは大人になっても変わらず、小説家を志したきっかけの一つでもある。

同じ場所でも、明るい昼間と真っ暗な夜では全く違って見えるように、人間にも、表と裏、さまざまな顔がある。新聞が伝えるのが光の部分なら、小説が描き出すのは影や闇。それは、より人間の本質に迫るものといえる。

外国映画などを見ていて思うのは、夜の街を描くのがうまい人は人間の内面を描くのもうまい。小説のなかで人間の心理を描くときにも、夜の闇や、そこにともる灯りは重要な要素だ。心が癒されるような仄かな灯りもあれば、見たくなかったものまで見せてしまう明るすぎる照明もある。私も多分、夜の場面に自分のメッセージを託すだろう。小説家として経験を積むなかで、灯りにはもっと重要な役割を担ってもらわないといけないし、もっと闇を物語に織り込んでいけるようになりたい。

もともと日本には、独特な灯りの文化があった。金屏風が薄暗がりの中でしっとりと輝く美しさや、薪能で面の陰影を照らし出す篝火。それらはいずれも、闇を生かす灯りの作法。そういう灯りの使い方は忘れたくない。

秋――空気が澄んでいく秋から冬にかけては、事務所から近い六甲の夜景も、より鮮明にくっきりと見えてくる。日が短くなるこの季節、多くの人にとっては次第に光が失われていくように感じる時期かもしれない。けれど私にとっては、夜ごと灯りが近づく季節。澄んだ夜の空気の中で夜景が美しく輝きを増してくる、そんな楽しみが近づく季節だ。

まやま じん 作家
1962年大阪市生まれ。同志社大学法学部政治学科卒。87年中部読売新聞（現・読売新聞中部本社）入社。89年退社、フリーライターを経て、2004年『ハゲタカ』でデビュー。同作はドラマ化、映画化され大反響を呼ぶ。経済・金融のほか、メディア、エネルギー問題などさまざまなテーマで作品を発表。他の著書『レッドゾーン』『虚像（メディア）の砦』『バイアウト』『プライド』『マグマ』『ベイジン』など。
http://www.mayamajin.jp/